
日本人大学生における性的身体接触経験と抵抗感の性差¹⁾

羽成隆司 河野和明 伊藤君男 石垣舞子

要約

不快な事物や人物、または親しい他者に対する嫌悪感と接触回避について調べたこれまでのわれわれの研究では、男性に比べて女性は同性に対して受容的であることが示されている。本研究では、女性の受容性が性的身体接触においても見られるかを確認するため、性的指向を示唆する経験や性的身体接触の受容性の性差、および、これらと接触回避傾向との関連を調べた。日本人大学生447人（女性318人、男性129人）を分析の対象とした。同性および異性に対する恋愛感情や性的身体接触の経験者の割合には、明瞭な性差は認められなかった。しかし、同性との性的身体接触への不快感や抵抗感の程度は、性的関係を持つことを除き、ほぼ一貫して男性よりも女性の方が小さく、女性の同性に対する受容性の高さが確認された。また、性的身体接触と嫌悪的人物への接触回避との間には、女性のみある程度の関連が見いだされた。

キーワード：性的身体接触、接触回避、性差、性的指向

はじめに

われわれはこれまで、嫌悪感や接触回避の適応的意義について検討するため、Haidt, McCauley, & Rozin (1994) の嫌悪感尺度、河野・羽成・伊藤 (2012) の接触回避尺度等を用いて、不快な事物や人物に対する嫌悪感と接触回避の特徴、さらに、親しい他者に対する嫌悪感を含めた諸感情や接触回避の特徴について調べてきた。

こうした一連の分析によって、いくつかの性差が見いだされている。たとえば、不快あるいは不潔な事物や状況に対しては全般的に男性よりも女性の方が嫌悪感が強く、また、ステイグマを伴った人物、嫌悪的人物においては、女性は同性より異性への接触回避が強かった。これに対して、男性は対象人物の性差がほとんど見られなかった

(Kawano, Hanari, & Ito, 2011)。さらに、家族や友人などの親しい人物を対象にした場合でも、女性は同性より異性への接触回避が強かった(羽成・河野・伊藤, 2009a; 羽成・河野・伊藤・角田, 2014)。つまり、女性は、同性友人より異性友人、母親より父親、女性きょうだいより男性きょうだいに対する接触回避の傾向が強いのである。男性ではこのような対象人物の性差は見られないか、あっても非常に小さかった。

さらに、恋愛対象者への接触回避と諸感情の特徴を分析したところ、女性では、恋愛対象者（この研究では分析の対象が異性愛者に限定されている）への接触回避の程度が異性の友人よりもかなり小さくなるものの、同性友人への接触回避ほどには低下しないことが示された(河野・羽成・伊藤 [印刷中])。また、羽成・河野 (2012) と同じく、恋愛対象者に対する熱愛度に性差がないことがここでも確認されたが、女性における恋愛対象

者への接触回避の程度は男性よりも大きかった。

上記の傾向は、女性が家族や友人などの親しい人物を含めて、異性に対して潜在的な性的防衛を維持している可能性を示唆しているが（羽成・河野・伊藤, 2009b, 2011；河野・羽成・伊藤 [印刷中]）、同時に、男性に比べて女性は同性に対して親和的、受容的であることを示している。

女性における他者との親和性や受容性の高さは、女性が男性に比べて共感性が高いこと（Baron-Cohen, Knickmeyer, & Belmonte, 2005）、自己開示の高さ（Derlega, Metts, Petronio, & Margulis, 1993）、子育てなどの親和的な対人接触の機会が多いこと等にも反映されていると思われる。しかし、とくに同性に対する接触において、女性が男性よりも親和的、受容的である理由をさらに考察するためには、関連する様々な傾向を確認しておく必要がある。

そこで本研究では、探索的な試みの一つとして、性的指向を示唆する経験や性的な身体接触の受容性の性差、および、これらとこれまでわれわれが着目してきた嫌いな他者に対する接触回避傾向との関連を調べてみた。

方法

調査対象

愛知県内の共学大学、女子大学の学部学生447人（女性318人、男性129人）を分析の対象とした。平均年齢は女性が19.89歳（SD=0.83）、男性が20.07歳（SD=1.19）であった。彼らは、心理学関連の授業の受講生の中からリクルートされたボランティアであった。

質問紙

調査に用いた質問紙は、性的指向を反映すると思われる、同性および異性との恋愛に関する感情、行動の経験の有無を尋ねる22項目（表1）、同性

または異性との自身の性的接触への不快感・抵抗感の程度を尋ねる8項目（表3）、同性他者どうしの性的接触への不快感の程度を尋ねる5項目（表4）、および、接触回避尺度から構成されていた。抵抗感、不快感の程度は7段階（1=まったくない～7=しばしばある、または、1=まったく感じない～7=非常に感じる）で評価するものであった。なお、文化によっては、異性と、または同性どうしで、手を繋ぐ、腕を組む、頬にキスをするといった行為が性的な意味を含まずに行われることも珍しくはない。しかし、日本では通常思春期以降において、性的な意味を伴わずにこのような行為をすることはあまりないと思われるので、これらを性的な身体接触の一部とみなした。接触回避尺度は、Kawano, et al. (2011) と同じ項目を使用し、同様な評定を行った。すなわち、これまで出会ったなかでもっとも生理的な嫌悪を感じる同性および異性を各一人想起させ、その人物のイニシャルを表記させた後、それらの人物について、8つの想定場面における回避の程度を測定するものであった。これらは7段階（1=まったく平気～7=非常にしたくない）で評価するものであった。8つの想定場面とは、(1) じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる、(2) 握手する、(3) 小さなテーブルで向かい合って話をする、(4) その人が長時間座ったイスに座る、(5) その人がずっと使っていたコップで飲み物を飲む、(6) 人工呼吸で自分の口からその人の口に息を吹き込む、(7) その人が入った後のお風呂に入る、(8) その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す、であった。全8項目の評定値の合計を接触回避得点とした。

結果と考察

性的指向を反映するこれまでの経験

表1は、同性および異性に対する恋愛感情と

表1 同性・異性に対する恋愛感情、性的身体接触経験の割合

	女性	男性	性差
1 同性に告白したことがある	94.0%	94.6%	
2 異性から告白されたことがある	8.5%	4.7%	
3 同性から告白されたことがある	53.5%	53.9%	
4 異性と手を繋いで歩いたことがある	2.5%	0.0%	
5 異性に恋愛感情を持ったことがある	76.4%	71.3%	
6 同性に恋愛感情を持ったことがある	8.5%	3.1%	*
7 同性と手を繋いで歩いたことがある	72.6%	69.8%	
8 異性と腕を組んで歩いたことがある	70.4%	57.4%	**
9 同性と腕を組んで歩いたことがある	57.2%	50.4%	
10 異性とハグをしたことがある	67.0%	45.7%	**
11 同性とハグをしたことがある	70.4%	67.4%	
12 異性に告白したことがある	84.3%	73.6%	**
13 同性に性的魅力を感じたことがある	48.9%	51.9%	
14 異性と性的関係を持ったことがある	60.1%	56.6%	
15 同性と性的関係を持ったことがある	21.1%	16.3%	
16 異性の頬にキスしたことがある	18.6%	13.2%	
17 異性と口と口でキスをしたことがある	90.2%	91.5%	
18 同性の頬にキスしたことがある	18.6%	14.7%	
19 同性と口と口でキスをしたことがある	67.2%	82.0%	**
20 異性に胸がどきどきする感情を抱いたことがある	9.5%	14.0%	
21 異性に性的魅力を感じたことがある	40.7%	43.4%	
22 同性に胸がどきどきする感情を抱いたことがある	1.3%	0.0%	

* $p < .05$ ** $p < .01$

性的接触を中心とした身体接触の経験の割合、表2はその実数を男女別に示したものである。項目ごとに χ^2 検定を行ったところ、性差が有意であったのは、「6 同性から告白されたことがある」、「8 同性と手を繋いで歩いたことがある」、「10 同性と腕を組んで歩いたことがある」、「12 同性とハグをしたことがある」、「19 異性に性的魅力を感じたことがある」であった。これらのうち、同性に関する項目は、すべて女性の方で経験率が高かった。また、同性について問う11項目について2項確率を計算すると、肯定率が[男性>女性]となるのが1項目以下である確率は $p = .0059$ であった。ここでリストアップした性的事態において同性に関する経験の肯定率が高いのは女性であると言える。

異性に対しての恋愛感情と身体接触について

は、上記「19 異性に性的魅力を感じたことがある」で男性の方が高かったことを除いて、性差は認められなかった。一方、同性に対しての恋愛感情と身体接触については、女性の方が全体に経験者の割合が高い。ただし、恋愛感情、キス、性的関係など、性的な感情や行為を直接表す内容については、性差が有意ではなかった。同性愛的な指向を反映する経験の割合はやや女性が高いが、今回の測定の範囲で個別の項目に明瞭な性差があるとは言いがたい。

なお、本調査で性的身体接触の事例として設定した、手を繋ぐ、ハグ、キス等は、幼少期においては、相手の性にかかわらず、また、性的な意味を伴わずに、友人間、家族間でほとんどの調査対象が経験していたと思われる。本調査では、幼少期の経験も含めて回答されていた場合、および、

表2 同性・異性に対する恋愛感情、性的身体接触経験の実数

	女性			男性		
	ある	ない	未回答	ある	ない	未回答
1 異性に恋愛感情を持ったことがある	299	19	0	122	7	0
2 同性に恋愛感情を持ったことがある	27	291	0	6	123	0
3 異性に告白したことがある	170	148	0	69	59	1
4 同性に告白したことがある	8	310	0	0	129	0
5 異性から告白されたことがある	243	75	0	92	37	0
6 同性から告白されたことがある	27	290	1	4	125	0
7 異性と手を繋いで歩いたことがある	231	87	0	90	39	0
8 同性と手を繋いで歩いたことがある	224	94	0	74	55	0
9 異性と腕を組んで歩いたことがある	182	136	0	65	64	0
10 同性と腕を組んで歩いたことがある	213	105	0	59	70	0
11 異性とハグをしたことがある	224	94	0	87	42	0
12 同性とハグをしたことがある	268	50	0	95	34	0
13 異性の頬にキスしたことがある	155	162	1	67	62	0
14 異性と口と口でキスをしたことがある	190	126	2	73	56	0
15 同性の頬にキスしたことがある	67	250	1	21	108	0
16 同性と口と口でキスをしたことがある	59	258	1	17	112	0
17 異性に胸がどきどきする感情を抱いたことがある	286	31	1	118	11	0
18 同性に胸がどきどきする感情を抱いたことがある	59	258	1	19	110	0
19 異性に性的魅力を感じたことがある	213	104	1	105	23	1
20 同性に性的魅力を感じたことがある	30	287	1	18	111	0
21 異性と性的関係を持ったことがある	129	188	1	56	73	0
22 同性と性的関係を持ったことがある	4	313	1	0	129	0

比較的最近の経験をもとに回答されていた場合の両者が含まれると推測される。今後の調査ではこの点を考慮し、経験の範囲を思春期以降に限定する必要がある。

性的身体接触に対する不快感・抵抗感

表3は、自身が同性および異性と性的身体接触をすることに対する不快感・抵抗感の評定平均値を男女別に示したものである。項目ごとに*t*検定を行ったところ、「23 異性の裸体を見て不快に感じる」、「30 同性と性的関係を持つことに抵抗を感じる」以外はすべてに性差が有意であり（質問番号24： $t = -2.10, df = 445, p < .05$; 同25： $t = -3.85, df = 444$; 同26： $t = -4.09, df = 445$; 同27： $t = -3.21, df = 445$; 同28： $t = -3.65, df = 444$; 同29： $t = -3.33, df = 443$, 以上すべて $p < .01$ ）、女性の方が同性と

の性的身体接触において受容的であると言える。ただし、性的関係を持つことについては男性と差が見られず、同程度に高い抵抗を感じている。

表4は、同性の他者どうしが性的身体接触をすることに対する不快感の評定平均値を男女別に示したものである。項目ごとに*t*検定を行ったところ、すべての項目で性差が有意であり（質問番号31： $t = -3.37, df = 444, p < .01$; 同32： $t = -3.42, df = 444, p < .01$; 同33： $t = -2.46, df = 445, p < .05$; 同34： $t = -3.16, df = 445, p < .01$; 同35： $t = -2.39, df = 445, p < .05$ ）、自身の身体接触の場合と同様に、ここでも女性の方が同性との性的身体接触において受容的であるという特徴が見られる。

2011年に行われた大学生を含む青少年の性的行動の調査では、デート、キス、性交の経験、性に対する様々な意識等、多くの内容が報告されて

表3 自身が性的身体接触をすることに対する不快感・抵抗感の程度

	女性		男性		
	平均	SD	平均	SD	
23 異性の裸体を見て不快に感じることもある	3.60	1.48	3.58	1.65	
24 同性の裸体を見て不快に感じることもある	2.96	1.55	3.30	1.57	*
25 同性と手を繋いで歩くことに抵抗を感じる	3.25	2.00	4.05	2.02	**
26 同性と腕を組んで歩くことに抵抗を感じる	3.24	2.08	4.12	1.97	**
27 同性とハグすることに抵抗を感じる	2.54	1.71	3.12	1.72	**
28 同性と頬にキスすることに抵抗を感じる	4.63	1.71	5.34	1.67	**
29 同性と口と口でキスすることに抵抗を感じる	5.68	1.65	6.22	1.30	**
30 同性と性的関係を持つことに抵抗を感じる	6.14	1.71	6.24	1.30	

* $p < .05$ ** $p < .01$

表4 同性の他者どうしが性的身体接触をすることに対する不快感の程度

	女性		男性		性差
	平均	SD	平均	SD	
31 自分以外の同性同士が手を繋いでいるところを見たとき不快に感じる	2.90	1.79	3.53	1.73	**
32 自分以外の同性同士が腕を組んで歩いているところを見たとき不快に感じる	2.68	1.65	3.26	1.64	**
33 自分以外の同性同士がハグをしているところを見たとき不快に感じる	2.40	1.54	2.80	1.53	*
34 自分以外の同性同士が頬にキスをしているところを見たとき不快に感じる	3.70	1.94	4.33	1.83	**
35 自分以外の同性同士が口と口でキスをしているところを見たとき不快に感じる	4.54	2.06	5.05	1.88	*

* $p < .05$ ** $p < .01$

いる（日本性教育協会, 2013）。ここには、性的指向に関わる項目はほとんど設定されていないが、「同性と性的行為をすることがあってもかまわない」という質問に対して、“そう思う”、“どちらかといえばそう思う”という肯定的な回答をした割合は、中学生、高校生、大学生いずれにおいても、女性の方が男性より高くなっていた。これも本調査の結果と合致して、女性の方が同性との性的な身体接触において受容的であることを示していると言えよう。

嫌悪人物に対する接触回避得点

表5は、同性および異性の嫌悪的人物に対する

接触回避得点の平均値を男女別に示したものである。回答者の性×対象者の性の2要因分散分析を行ったところ、対象者の性の要因のみ有意であり（ $F = 158.42, p < .01, df = 1, 445$ ）、男女いずれも同性より異性に対して接触回避の程度が大きいという結果となった。これは、これまでわれわれが確認してきた諸結果とは異なっている。表6に示すように、Kawano, et al. (2011) ほかでは、男性が対象者の性にかかわらず同程度の接触回避を示したのに対して、女性では、同性より異性に対してより高い接触回避を示すという特徴が一貫して得られてきた。しかし、本調査では、女性のみではなく、男性においても異性に対する接触回避が見

られた。とくに男性回答者の異性への回避得点が Kawano, et al. (2011) よりも大きかった。

本研究で用いた質問紙は、性的指向に関わる質問の後に接触回避尺度の項目に回答する構成になっていたため、性的指向への回答が接触回避評定に対するなんらかのプライマーになり、それがこれまでと異なった結果をもたらしたのかもしれない。また、Kawano, et al. (2011) と同じ接触回避尺度の項目を用いているが、これまでは嫌悪的人物を想起させる際の指示として、“……な男性”、“……な女性”という表現を用いていたのに対して、本研究では、“……な同性”、“……な異性”という表現を用いた。わずかな表現の差異とはいえ、これが接触回避の評定結果に影響を及ぼした可能性も否定できない。

接触回避得点と性的身体接触に対する抵抗感の関係

本報告における接触回避得点の傾向の解釈についてはさらに検討を要するところではあるが、ここでは、男女それぞれにおいて、同性および異性に対する接触回避得点それぞれと、上述の性的身体接触に対する抵抗感・不快感各項目の評定値との相関分析を行った。

女性では、同性に対する接触回避得点と有意な正相関が見られたのは「自分以外の同性どうしが腕を組んで歩くことに抵抗を感じる」のみであった ($r = .122, p < .05$)。異性に対する接触回避得点と有意な正相関が見られたのは「異性の裸体を見て不快に感じることもある」と「自分以外の同性どうしが口と口でキスをしているところを見たとき不快に感じる」であった (順に、 $r = .160, p < .01, r = .110, p < .05$)。また、異性に対する接触回避得点は、「同性と腕を組んで歩くことに抵抗を感じる」および「同性の頬にキスすることに抵抗を感じる」に対して有意な負の相関が見られた (順に、 $r = -.135, r = -.139$, いずれも $p < .05$)。いずれも相関係数の絶対値は小さく、結果は明瞭

でないものの、異性に対する接触回避得点と「自分以外の同性どうしが口と口でキス」の正相関を除くと、嫌悪的な同性への接触回避の程度が小さい、または、嫌悪的な異性への接触回避の程度が大きい者ほど、同性との性的身体接触に受容的である可能性が示唆される。

一方、男性では、すべての項目において、有意な相関は見られなかった。

上記の結果は、女性においてのみ、性的身体接触と嫌悪的人物への接触回避とがある程度の関連を持っていることを示しており、また、同性への受容性と異性への非受容性がこの結果に反映されているようにも思われる。ただし、本結果で示された相関係数が非常に小さいことや、接触回避得点の性差がこれまでと異なっていたことから、性的身体接触と嫌悪的人物への接触回避との関連についてはさらに慎重に検討する必要がある。質問紙の構成を修正した再調査を行い、さらに分析を継続したい。

表5 同性および異性の嫌悪的人物に対する接触回避得点

	評定対象者			
	同性		異性	
回答者	平均	SD	平均	SD
女性	44.18	10.95	50.25	8.55
男性	43.28	9.89	48.92	8.69

表6 Kawano, et al. (2011) の接触回避得点

	評定対象者			
	同性		異性	
回答者	平均	SD	平均	SD
女性	38.97	12.97	48.04	7.66
男性	41.56	10.65	42.41	11.23

結論

本研究では、同性に対する恋愛感情や性的身体接触について、全体に女性の方が経験の割合が高いが、各項目ではさほど明瞭な性差は認められなかった。しかし、同性との性的身体接触への不快感や抵抗感の程度は、性的関係を持つことを除き、ほぼ一貫して男性よりも女性の方が小さく、女性の同性に対する受容性の高さが確認された。また、性的身体接触と嫌悪の人物への接触回避との間には、女性のみある程度の関連が示唆され、この点においても男性と異なる女性の特徴がうかがわれた。ただし、本研究での接触回避の傾向がこれまで確認されてきたものと異なる点があるため、調査計画を再検討し、性的身体接触と接触回避との関連については、さらに分析を行う必要がある。

注

- 1) 本研究は、JSPS 科学研究費補助金 (26590135) の助成を受けた。

引用文献

- Baron-Cohen S., Knickmeyer, R. C., & Belmonte, M. K. (2005) Sex differences in the brain: implications for explaining autism. *Science*, 310, 819-823.
- Derlega, V. L., Metts, S., Petronio, S., & Margulis, S. T. (1993) *Self-disclosure*. London: Sage. (ダーレガ, V.J., メッツ, S., ペトロニオ, S., マーグリッス, S. T. [著], 齊藤勇 [監訳] [1999] 人が心を開くとき・閉ざすとき — 自己開示の心理学. 金子書房)
- Haidt, J., McCauley, C., & Rozin, P. (1994) Individual differences in sensitivity to disgust: a scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.
- 羽成隆司・河野和明 (2012) 恋愛対象者への熱愛度と肯定および否定的感情：日本語版熱愛尺度を用いて. 椋山女学園大学文化情報学部紀要第12巻, 65-69.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2009a) 対人認知における嫌悪感情の分析：配偶者選好の視点から. 椋山女学園大学文化情報学部紀要第9巻1号, 59-66.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2009b) 母やきょうだいに対する嫌悪感インセスト回避の表れか？ 椋山

- 女学園大学文化情報学部紀要第9巻第2号, 45-53.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2011) 配偶者選択の点から見た身体に対する接触回避の適応的意義. 椋山女学園大学文化情報学部紀要第11巻, 91-98.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男・角田千夏 (2014) 青年期の女性の父親に対する回避傾向. 椋山女学園大学文化情報学部紀要第14巻, 93-100.
- Kawano, K., Hanari, T. & Ito, K. (2011) Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: mate choice. *Psychological Reports*, 109, 639-648.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2012) 「接触回避尺度」開発の試み. 東海学園大学紀要第18号, 155-161.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究. (印刷中)
- 日本性教育協会編 (2013) 「若者の性」白書—第7回 青少年の性行動全国調査報告一. 小学館

はなり・たかし/文化情報学部教授

E-mail hanari@sugiyama-u.ac.jp

かわの・かずあき/東海学園大学人文学部教授

いとう・きみお/東海学園大学人文学部准教授

いしがき・まいこ/文化情報学部